

# 終戦70年 体験を語る

④

## 平和案内人 田中安次郎さん

「あの時出会った中争をしたのか」と問われたが、すぐに答えられなかった。語ることは今生きている者の使命だと思っ

## 「平和につながる一歩を踏み出す」

田中安次郎さん（長崎市深志寺門徒、72）は長崎原爆資料館の駐在員。15年、修学旅行の中学から「なぜ日本は戦り、兵器廃絶のことで無頓着、何も知らず、何も言えず、これでいいのか」と自問自答の日々が続いた。

「原爆のことは忘れたい」と思っていた。核兵器がなくなるわけではなく、大切なものは、平和につながる一歩を踏み出すこと。話すと、光景が忘れられない。被爆したのは3歳の時。「記憶というより、感覚として体感した」と語る。異様な臭いは、今でもよみがえる。

爆心地から3・4キロ。原爆資料館や被爆遺構を案内し、近くの路上で、祖母と示物が語りかけている。



手作りの教材で出前講座。小中学生に被爆体験を伝える

2歳下の妹と遊んでいた。「バババーツとカ」のフラッシュを何回も浴びたように感じたら、3人でとっさ

と感ずることがある。見るだけでなく、想像してほしい。あの家の人はその時どうしたんだろう。あの弁当箱の持ち主はどうなったのか。そこには市民の、

## 「自宅に被爆者招き入れ、励まし合った」

### 寺元 弘子さん

無数の家族の生活があった。ずっと人間が生き続けたと伝えていく。私たちが、被爆者の平和への思いをつなぐ存在」と活動を広げ、平和案内人有志で「九日の会」を平成19年に結成、その代表を務める。また、親交のあった被爆者の故・吉田勝二さん（長崎市・光源寺門徒）の被爆体験を描いた紙芝居を持ち、市内の小中学校などで「出前講座」。実際の写真資料なども織り交ぜながら戦争の愚かさ、原爆の恐ろしさ

寺元弘子さん（長崎市・発心寺門徒、91）瞬間、落下傘爆弾のよ

の自宅は爆心地から4キロの長崎市愛宕町。空襲警報のサイレンを聞いた。2月に生まれたばかりの長男・勲さんを行季に入れ、防空壕へ逃げ込んだ。「警報が解除されたので川へ涼みに行こう」と思い、ふと愛宕山を見上げると敵機が飛ん

# 長崎原爆



原爆落下中心地公園の被爆遺構を案内する田中安次郎さん



寺元弘子さん

た。夫は平成13年に亡くなったが、夫は多くを語りなかつた。私も伝えたい。若い人には「核兵器廃絶」を強く訴える行動をしてほしい。